Hiroshima Journal of International Studies Volume 22 2016

日本人戦没オリンピアン名をめぐる混乱とその真相
－ベルリンに届けられた大島鎌吉の作成名簿更新の試み－

曾根幹子　　卜部匡司

Historical Study of Japanese Olympians Killed in War：Reconstructing the Roster Brought to Berlin by Kenkichi Oshima

Mikiko SONE　　Masashi URABE

This study clarifies the number of Japanese Olympians killed in war or by violence. The Sports Museum in Berlin has been gathering the names of Olympians who have fallen victim to acts of violence or war in order to honor them and to appeal for a peaceful world. Currently, the museum has a roster with the names of only five Japanese victims. In 1982, Kenkichi Oshima (A member of the Japanese Olympic Committee) should have brought a list of 30 additional names to Berlin in order to add them to the pedestal of the Olympic bell at Berlin Olympic Stadium. However, it is impossible now not only to find the roster but even to locate the pedestal for the Olympic bell in Berlin. At the same time, Yasukuni Shrine has a list of 31 other Olympians from Japan who became war victims. We make it clear why it's different in three Lists. Our research compares and adjusts these three different lists. As a result, we propose that a new roster should be made with the names of 37 Japanese victims.

Ⅰ．はじめに
Ⅱ．日本人戦没オリンピアンの名簿
　1．大島鎌吉の作成名簿（1982 年）
　2．わが国における戦没オリンピアンの調査
　3．靖国神社「オリンピック関係戦没者遺品展」のリスト（1964 年）
Ⅲ．ベルリン・スポーツ博物館の「世界戦没オリンピアン」名簿
　1．ベルリンの「平和の鐘」と戦没オリンピアンの追悼
　2．戦没オリンピアン名の「平和の鐘」台座刻印の真相
　3．「世界戦没オリンピアン」名簿にみる日本人戦没者名
　4．大島鎌吉とハンス・フリッチの関係
Ⅳ．日本人戦没オリンピアン名をめぐる混乱
　1．混乱の真相
　2．「戦没オリンピアン」の定義
　3．大島鎌吉の作成名簿の更新
Ⅴ．おわりに

Ⅰ．はじめに

わが国では 2020 年オリンピック・パラリンピック東京大会（以下、2020 年東京五輪）の開催が決定し、再び 1964 年に開催された東京五輪がクローズアップされている。中でも大島鎌吉[1]に関しては、前回の東京五輪の招致活動に深く関わり「オリンピック運動の核心は青少年育成運動にある」（伴 2014：71）という自らの信条に基づき、青少年育成や平和運動に傾注した人物として改めてその考え方や活動に注目が集まっている[2]。大島の平和思想の原点は「従軍記者として欧州をかけめぐった戦争体験しかないだろう」[3]と言われ、大島の評価の中には「最大の功績は核廃絶反戦平和運動への積極的な参加だった」[4]という見方があるほどだ。大島はドイツ語と英語が堪能だったこともあり、戦前は選手やコーチ・監督として日本陸上界を牽引し、戦後もドイツ人脈を駆使しながらスポーツによる日独交流の推進に尽力し「オリンピックが世界平和に貢献するという信念」[5]をもって、オリンピック運動や反核・

キーワード：日本人戦没オリンピアン　戦没選手名簿　大島鎌吉　ベルリン　平和の鐘

軍縮運動、ノーモア・ヒロシマ＆ナガサキなどの反戦運動に熱心に取り組んだ。その過程においては、1959年にノーベル平和賞を受賞した平和運動家で国際政治家のフィリップ・ノエル＝ベーカー[6]、ドイツのスポーツ史家・カール・ディーム[7]、西ドイツ陸上チームの監督・コーチを長く務めたマインツ大学のベルノ・ウイッシュマン[8]らとの深交や影響があった。

大島は既述した功績などにより、1982年に欧米人以外では初の「ハンス・ハインリッヒ・ジーフェルト賞（オリンピック平和賞）」[9]を受賞している。同年7月、大島は授賞式に出席するためドイツのオイティン市を訪問しているが、授賞式の前にベルリンまで足を延ばしている。大島が出向いた理由は、新しく造られるベルリンの「平和の鐘」の台座に、世界の戦没オリンピアンの名前が刻まれるという情報を聞き、日本人戦没オリンピアンの名簿を持参するためだった[10]。世界戦没オリンピアンの追悼を、ベルリンの「平和の鐘」のもとで行うことを呼びかけたのは、ドイツのハンス・フリッチ[11]だった。この話は2年後に初めて朝日新聞で報道され、「『平和の鐘』の台座には、世界24ヵ国280人の戦没オリンピアンの名前と共に、30人の日本人戦没オリンピアンの名前が刻印された」（1984年7月27日）ことが記事になった[12]。

ところが現在、ベルリンのオリンピックスタジアム南門側に「平和の鐘」はあるものの、実際には「平和の鐘」に台座はない[13]。つまり、報道されたような戦没オリンピアン名が刻印された台座はなく、戦没オリンピアンの名前を記した板も見当たらない。しかし、「台座に刻印」されたことは、先の朝日新聞（1984年7月27日）だけでなく、それ以前の記事（朝日新聞1982年5月9日）に「刻む計画あり」と記され、それ以降の新聞記事にも平和の鐘の台座に戦没オリンピアン名が「刻まれた」と書かれてある[14]。では、大島がベルリンに持参した戦没オリンピアンの名簿や、名前が刻まれた「平和の鐘」の台座の行方はどうなったのか。大島鎌吉が作成した戦没オリンピアン名簿と、「平和の鐘」台座刻印にはどのような関係があり、いかなる経緯で大島が関わったのか。先行研究を概観すると、大島鎌吉の「思想」関連などの研究は多数存在するものの、「戦没オリンピアン名簿」や「平和の鐘の台座」に関する研究及び大島と先の2点を関連付けた研究は皆無であった。

そこで事前調査として「平和の鐘」を管理するベルリン・スポーツ博物館（Sport museum）に問い合わせたところ[15]「戦争と暴力で亡くなった日本のオリンピック選手は5人であり、30人の日本人戦没者リストは存在しない」との回答があった。また先のスポーツ博物館から提供された日本人戦没者リスト[16]には、朝日新聞（1984年7月27日）に公表された以外の名前が記載されていた。すなわちベルリンのスポーツ博物館が所有している日本人戦没オリンピアンのリストは、大島がベルリンに直接持参した名簿ではないことが判明したのである。では、戦没オリンピアン名をめぐるこのような混乱は、なぜ起きているのだろうか。そして戦没オリンピアンの「名前が刻まれた」平和の鐘の台座の行方はどうなったのか。そもそも大島鎌吉がベルリンに持参した戦没者名簿－朝日新聞に掲載された戦没オリンピアン名－は、正確だったのか。

本稿では文献調査及び現地での聞き取り調査をもとに、戦没オリンピアン名をめぐる混乱や、「名前が刻まれた」平和の鐘の台座に関する真相を解明する。その上で大島がベルリンに持参した「日本人戦没オリンピアン」の名簿を、より正確なものに更新することを研究の目的としている。

Ⅱ．日本人戦没オリンピアンの名簿

1．大島鎌吉の作成名簿（1982年）

表1は、朝日新聞（1984年7月27日）に掲載された「『平和の鐘』の台座に刻まれた30代表の全調査」(ママ)である。記事には「氏名」のほかに、「出場五輪」「競技」「出場種目と成績」「出身大学」「戦死日」「戦死時の年齢」「戦死場所」「結婚歴」「遺族所在」の9項目が掲載されている（表1では「遺族所在」の詳細は削除した）。調査主体は記載されていないが、手がかりは残されている。記事には「30代表の戦死が確認されたのは東京五輪（昭和39年）前の日本体育協会調査」とある。1964年東京五輪の開幕直前までに日本人「戦没オリンピアン」の調査は2回なされている。1回目は1956年の日本オリンピック委員会（以下、ＪＯＣ）の調査であり、2回目は1964年の日本体育協会の調査である。大島がベルリンに持参した戦没オリンピアンの名簿は、2回目の日本体育協会の調査を基にしたと考えられ

る[17]。その根拠は、① 1964 年の日本体育協会の調査は、大島が日本の戦没選手名簿作成の窓口として関わっていたこと（朝日新聞 1984 年 8 月 11 日）。② 西ドイツの戦没者墓地管理委員会のハンス・ビュティコッファー会長から、「日本オリンピック委員会の大島鎌吉委員へ『日本の戦没者もぜひ加えたい』との手紙が届いた」（朝日新聞 1982 年 5 月 9 日）ことにより、当時、大島は確かな戦没オリンピアン名簿の作成が急務だったこと。③「ハンス・フリッチ氏の呼びかけで、平和の鐘の台座に（略）名前が刻まれた」（朝日新聞 1984 年 7 月 27 日）とあることから、大島と親交のあった戦没者追悼活動推進者のハンス・フリッチに、自身が作成した名簿を直接手渡した可能性が高いことである。つまり朝日新聞に掲載された戦没オリンピアン「30 代表の全調査」は、大島が中心となり実施したもので、大島が 1982 年にドイツに直接持参した戦没オリンピアン名簿と同じ内容であることは、先にあげた根拠からも疑いようがないだろう。

ところで後日、この新聞記事を読んだ遺族から連絡が入り、戦没オリンピアンのリストから漏れていた選手がいることが判明した。連絡者はベルリン五輪水球代表の若山滝美選手の夫人で、若山は中国の野戦病院で腸チフスのため亡くなっていた[18]。この件に関して新聞社の取材に応じた大島は、「私のもとには他にも原爆で亡くなった五輪選手の情報があり、それらを調査したうえ追加選手として要請したい」とコメントしている。大島が取材に応じた時期は、大島自身も食道がんを患い、2 月に東京渋谷区の病院に入院をするなど、体調の悪い時期でもあった。大島は翌年（1985 年）1 月、ドイツに渡航途中のロサンゼルスで倒れ、帰国後の 3 月 30 日に亡くなっている。大島は新たに見つかった戦没オリンピアンや原爆で亡くなった選手を、ベルリンの世界戦没オリンピアンの名簿に追加したいと望んでいたが、その願いは思い半ばに終わってしまった。

表 1　「『平和の鐘』の台座に刻まれた 30 代表の全調査」（ママ）

氏名	出場五輪	競技	出場種目と成績	出身大学	戦死日	戦死時の年齢	戦死場所	結婚歴	遺族所在
相沢　巌夫	アムステルダム	陸上	100、200 m予選落ち	京都大学	1945年10月	41	ルソン島（ニュー・ビリットでマラリアの為病死）	既婚	在る
落合　正義	ロサンゼルス	陸上	ハンマー投・12 位	明治大学	1939年12月	30	北支	独身	在る
長尾　三郎	ロサンゼルス	陸上	槍投・10 位	関西大学	1943年11月	33	中部ニューギニア	既婚	在る
阿武　巌夫	ロサンゼルス	陸上	400 mリレー・5 位	慶応義塾大学→中大	1939年12月	31	中支	既婚	在る
大江　季雄	ベルリン	陸上	棒高跳・3 位	慶応義塾大学	1941年12月	28	ルソン島	独身	在る
高野　重幾	ベルリン	陸上	陸上監督	明治大学	1945年 7月	37	甲府市空襲	既婚	在る
鈴木　房重	ベルリン	陸上	出場せず	日本大学	1945年 6月	31	ルソン島	既婚	在る
谷口　睦生	ベルリン	陸上	200my 予選失格	関西大学	1943年10月	30	ブーゲンビル島	独身	在る
鈴木　聞多	ベルリン	陸上	400 mリレー失格	慶応義塾大学	1939年 7月	27	北支	独身	在る
内田　正練	アントワープ	水上	100m 自由形予選失格	北海道大学	1945年 2月	47	ニューギニア	既婚	在る
斎藤　魏洋	パリ	水上	100m 背泳ぎ決勝欠場	立教大学	1944年 9月	41	マニラ	既婚	在る
武村　寅雄	ロサンゼルス	水上	出場せず	明治大学	1945年 7月	31	ミンダナオ島	既婚	在る
石田　英勝	ロサンゼルス	水上	高飛び込み 8 位	慶応義塾大学	1945年 2月	36	フィリピン	独身	無し
河石　達吾	ロサンゼルス	水上	100m 自由形 2 位	慶應義塾大学	1945年 3月	33	硫黄島	既婚	在る
吉田　喜一	ベルリン	水上	100m 背泳 5 位	早稲田大学	1944年12月	26	ミンダナオ島	独身	在る
児島　泰彦	ベルリン	水上	100m 背泳 6 位	慶應義塾大学	1945年 6月	26	沖縄	独身	在る
田中　一男	ベルリン	水上	出場せず	早稲田大学	1945年 3月	30	ニューギニア	独身	在る
新井　茂雄	ベルリン	水上	800m リレー優勝、100m 自由形 3 位	立教大学	1944年 8月	26	インパール（ビルマ方面）	既婚	在る
中村　英一	ロサンゼルス	ホッケー	2 位	慶応義塾大学	1945年 5月	36	東京空襲	既婚	在る
柴田　勝巳	ロサンゼルス	ホッケー	2 位	東京商科大学（一橋大）	1942年 8月	34	北支	既婚	在る
脇坂　貞雄	ベルリン	ホッケー	5 位	東京商科大学（一橋大）	不明	不明	不明	不明	不明
竹内　悌三	ベルリン	サッカー	2 回戦敗退	東京大学	1946年 4月	不明	シベリア	不明	不明
松永　　行	ベルリン	サッカー	2 回戦敗退	東京高等師範（筑波大学）	1943年 1月	28	ガダルカナル島	独身	在る
右近徳太郎	ベルリン	サッカー	2 回戦敗退	慶応義塾大学	不明	不明	不明	不明	不明
斎藤　盈夫	ロサンゼルス	ボート	エイト予選失格	早稲田大学	1939年 5月	29	北支	既婚	在る
村山　又芳	ロサンゼルス	ボート	出場せず	慶応義塾大学	1945年 5月	32	日本で病死	既婚	在る
満留　　勉	ベルリン	ボート	かじつきペア敗者復活戦敗退	早稲田大学	1945年 6月	31	沖縄	独身	在る
西　　竹一	ロサンゼルス ベルリン	馬術	ロス大障害飛越 1 位 ベルリン総合馬術個人 12 位	陸軍騎兵学校	1945年 3月	42	硫黄島	既婚	在る
吉本　善多	ベルリン	ヨット	出場せず	同志社大学	1944年 5月	29	インパール	既婚	在る
有本　彦六	ベルリン	体操	団体 9 位、個人 54 位	日本体育会体操学校（日本体育大学）	1945年 5月	30	東シナ海	既婚	在る

【出典：朝日新聞（1984 年 7 月 27 日）「戦火に散ったオリンピアン名簿」：東京夕刊】

2. わが国における戦没オリンピンの調査

戦後、わが国の戦没オリンピアンの調査は、どのくらい実施されてきたのだろうか。日本体育協会及びＪＯＣには当時の調査資料が残っていないため、戦没オリンピアンに関する調査報道や、戦没オリンピアン関連の企画展に関して書かれた新聞記事を集め、整理したものが表２である。ちなみに表で示した企画展は図録が残っており、戦没オリンピアンのリストや選手名が具体的に書かれてあるものを取り上げた。

表２　わが国の「戦没オリンピアン」調査

年	調査主体	タイトル	参考文献
1956年	日本オリンピック委員会	戦没オリンピアン慰霊祭	毎日新聞（1992年12月17日）東京朝刊：20面
1964年	靖国神社	オリンピック関係戦没者遺品展	読売新聞（1964年9月28日）東京朝刊：13面
	日本体育協会	戦没オリンピアン調査	朝日新聞（1984年8月11日）東京朝刊：20面
1982年	大島鎌吉	戦没オリンピアン調査	朝日新聞（1984年7月27日）東京夕刊：3面
1992年	日本オリンピック委員会	戦没オリンピアン（五輪選手）調査	朝日新聞（1993年3月26日東京朝刊：22面
2008年	秩父宮記念スポーツ博物館（1998年4月現在判明）	オリンピック　栄光とその影に～アムステルダム大会から東京大会まで～	昭和館特別企画展図録（平成20年2月開催）
2011年	靖国神社遊就館	スポーツと靖国神社～スポーツと共に生きた英霊たち～	平成23年遊就館特別展パンフレット（平成23年3月18日発行）

【筆者作成】

1964年に日本体育協会が行った戦没オリンピアンの調査では、名簿から抜け落ちている戦没者がいたことがわかった。既述した水球の若山である。1993年にも新たな戦没者が判明したが、その際の新聞記事から、戦没者オリンピアンの調査が最初に実施されたのは「1956年のオリンピックデーに、五輪選手の物故者慰霊祭を行った時の調査」[19]だったことがわかる。しかし、1992年になって靖国神社の戦没者名簿とＪＯＣの調査を照合したところ、「事実関係が違うケース」[20]が判明した。つまり両方の名簿の内容が一致しなかったのである。ではどのような部分で食い違いがあったのか。この点は記事では明らかにされていないが、「ＪＯＣは日本人戦没オリンピアンの正確な資料整理が必要なため各競技団体に調査を依頼し、まとめることを理事会で決定した」（毎日新聞 1992年12月17日）とある。その後、国際オリンピック委員会（ＩＯＣ）の名誉委員・清川正二は「体協75年史などの資料でも、戦没者には触れられていない。JOCとしてきちんとすべきだ」[20]と話している。しかし、オリンピック100年を記念して編纂された『日本体育協会・日本オリンピック委員会100年史 1911～2011』（2012）にも、戦没オリンピアンに関しては全く記載がない。1992年のＪＯＣ調査から20年以上経過した今日まで、日本人戦没オリンピアンの調査は等閑に付されたままになっている。

3. 靖国神社「オリンピック関係戦没者遺品展」のリスト（1964年）

1964年の東京五輪開催を直前に控えた10月１日から２か月間、靖国神社は社殿内にある宝物館において「オリンピック関係戦没者遺品展」を開催した。遺品展の目的はオリンピック選手としての栄光に輝きながら、太平洋戦争で亡くなった選手の過去を遺品でしのぶためであり、31人のオリンピアンの遺品が集められた。リストの中には女性でただ一人、ベルリン五輪の高飛び込みで６位に入賞した大沢政代の名前も載っている[21]。遺品展に出品があったオリンピアンのうち、大島の名簿に記載されていな

表３　大島鎌吉の作成名簿に記載のない戦没オリンピアン名

氏　名	出場五輪	競技	出場種目と成績	出身大学	戦死日	戦死場所
横山　隆志	ロサンゼルス	水上	800ｍリレー優勝 400ｍ自由形４位	早稲田大学	1945年	国内で戦病死
前田　倍三	ベルリン	水上	水球	早稲田大学	1943年8月	ソロモン群島で戦死（陸軍大尉）
大沢　政代	ベルリン	水上	高飛び込み	九段精華高女	1945年1月1日	中国瀋陽で戦病死
高橋　豊二	ベルリン	サッカー	五輪では出場機会なし	東京大学	1940年3月5日	海軍予備学生６期、飛行中殉職

【筆者作成】

かった戦没者は4人存在する（表3参照）。「戦死場所」をみると、1936年ベルリン五輪に出場した前田倍三（水上・水球）はソロモン群島（ママ）で戦死している。横山隆志（水上・400m自由形ほか）、大沢政代（水上・高飛び込み）、高橋豊二（サッカー）の3人は「病死」または「事故死」となっている[22]。一方で靖国神社の遺品リストに名前はないが、大島の名簿には「病死」で記載されていた選手がいる。1932年ロサンゼルス五輪・ボート代表の村山又芳である。

大島は名簿を作成する際、「間違いのない戦没者名簿をドイツに届け、奉納するため」に「受話器を握り（中略）、遺族探しをしていた」（岡 2013:289）という。つまり大島はできる限り遺族に確認したうえで名簿を作成しており、名簿に記載がなかったオリンピアンは、「遺族の在所」が確認できず削除したか、あるいは「病死」や「事故死」したオリンピアンを意図的に除外したことが考えられる。しかしルソン島で病死した相沢巌夫（陸上）や、「日本で病死」の村山は名簿に記載があることから、上述した理由は当てはまらない。すなわち靖国神社の「オリンピック関係戦没者遺品展」でリストに記されていたにも関わらず、大島の作成名簿に名前がなかったのは、何らかの理由があったと考えられる。では、大島が名簿から削除した意図（基準）はいかなるものだったのだろうか。

Ⅲ．ベルリン・スポーツ博物館の「世界戦没オリンピアン」名簿

1．ベルリンの「平和の鐘」と戦没オリンピアンの追悼

1982年に大島がドイツに届けた日本人戦没オリンピアンの名前は、「平和の鐘」の台座に刻印されることになっていた。「平和の鐘」は、1936年ベルリン五輪の開催にあたりシンボルとして造られたものだが、その鐘には言うまでもなくドイツやベルリンのシンボル（鷲の紋章、ブランデンブルク門およびハーケンクロイツ）が印されていた。しかし、1947年にイギリス占領軍によって鐘の塔が爆破されると、当時のドイツへの憎しみから鐘の紋章や印も砕かれ、一部に穴があいたまま鐘は地中に埋められ、その後、1956年に再び掘り出され「戦争と暴力行為によって命を落とした、全てのオリンピック選手への追悼のための記念碑」（釜崎 2008：101）として展示されるようになった。

こうして「警告」の記念碑として世界平和を訴える役割となったベルリンの「平和の鐘」の前で、1959年以来毎年「贖罪の日」（11月23日直前の水曜日）には戦没オリンピアンの追悼式が行われ、1961年からはこの追悼式をベルリン・スポーツ協会が後援し1973年まで継続してきた（Steins 2011）。1974年からは、追悼式を市内中心部のカイザー・ヴィルヘルム記念教会で開催することになり、1979年からは再びオリンピックスタジアムの「平和の鐘」のもとで追悼式を行うこととなった。

その先導役を務めたのが、1936年ベルリン五輪の旗手を務めたハンス・フリッチである。彼は1979年に「オリンピック参加者協会」および「スポーツ史フォーラム」を設立し、世界中の戦没オリンピアンをベルリンで追悼する活動を始めた。実際に1980年11月16日の「贖罪の日」には、ベルリン・オリンピック博物館のクーベルタン・ホールにおいて「戦争や暴力で命を落としたオリンピアン」の追悼式を行い、そこでオリンピック記念館の銅板を紹介している（Steins 2011）。

ベルリン・スポーツ博物館振興協会代表のシュタインズによると[23]、1979年の追悼式の際、戦没オリンピアンの名前は紙に書かれた状態で記録されていたが、その後処分されている。1980年11月16日の追悼式では、「オリンピック記念館」の銅板が紹介されたものの、銅板に選手の名前は刻まれていない。翌1981年には「ドイツ戦没者墓地管理委員会（Volksbund Deutsche Kriegsgräberfürsorge）」[24]が世界中の戦没オリンピアンを追悼する新しい追悼板を提案し、1982年11月14日の追悼式にはマラソンの孫基禎（1936年ベルリン五輪マラソン優勝）の令息なども出席して銅板の送呈式が行われた。この時「平和の鐘」の台座に添えられていた銅板の文字は、1981年の銅板と同じ文言であり、石の台座に戦没者名は刻まれていない。銅板に刻まれていたのは名前ではなく、「MEMORIAL HALL OF OLYMPIANS」の文字と戦没オリンピアンを追悼する言葉であった（Gemeinschaft der Olympiateilnehmer–Olympian International e.V.1983）。なお、大島が1982年7月にベルリンに届けた日本人戦没オリンピアンの名簿は、この年の11月の追悼式に間に合わせるためのものであった。ただし大島はこの追悼式には出席してお

らず、また1985年にドイツへの渡航途中で倒れ、帰国後に他界したため実際には銅板に刻まれた文字を確認していない。

1983年には、戦没オリンピアンの追悼式が2回にわたり開催されている。1回目は屋外にある「平和の鐘」のもとで、2回目は屋内のホールで実施されたが、この2回目の追悼式が屋内で行う最後のセレモニーとなった。屋内ホールでの追悼式では戦没オリンピアンの名前が初めて「刻まれた」が、刻印されたのは銅板や「平和の鐘」の台座にではなく、プラスチックのプレートだった。「銅板では戦没者名を追加することができない」[23]からだった。追悼式で使われた銅板は、1983年当時には大小2枚存在したが、その後小さい方の銅板は使用されていない。一方、「平和の鐘」の台座に置かれた大きい方の銅板は、サッカーのワールドカップドイツ大会（2006年開催）に向け、スタジアムの改修工事を行った2001年から2004年の間に盗難に遭い、現在も行方不明のままとなっている。また戦没オリンピアン名が刻まれたプラスチックのプレートも現存しない。

2. 戦没オリンピアン名の「平和の鐘」台座刻印の真相

朝日新聞（1984年7月27日）他の記事では、ベルリンの「平和の鐘」の台座に日本人戦没オリンピアン名が「刻印された」と報道されたが、戦没オリンピアン名は台座に刻まれていなかった。このことは、大島が「刻印された」はずの台座を確認しないうちに他界し、またマスコミも台座（現物）の文字を確認しないまま記事にしたことで、「間違った事実」が伝えられてきたのである。それは単なる「思い込み」による誤解だったが、筆者らの調査によって戦没オリンピアン名の、「平和の鐘」台座刻印に関する真相を明らかにすることができたと考える。

3. 「世界戦没オリンピアン」名簿にみる日本人戦没者名

大島がドイツに戦没者名簿を持参した1982年当時、世界の戦没オリンピアンはどのくらいの人数が把握されていたのだろうか。1984年に平和の鐘の台座には「世界24ヵ国280人」の戦没オリンピアンが刻まれたと報道され（朝日新聞1984年7月27日）、2週間後の同新聞（1984年8月11日）には、「第二次世界大戦で亡くなった24ヵ国283人」と記されている。では、ベルリン・スポーツ博物館が所有している世界戦没オリンピンの名簿には、どのように記録されているのか。

表4はベルリン・スポーツ博物館が所有している「世界戦没オリンピアン」の名簿[25]を基に、オリンピアンの出身国と人数を筆者らが整理したものである。名簿には世界11ヵ国161人のオリンピアン名が記されている。その中には日本人戦没オリンピアンとして、以下の5人が記載されている。① SUEO OE/ 大江季雄（1936年ベルリン五輪・陸上棒高跳、1941年没）、② TAKEICHI BARON NISHI/ 西竹一（1932年ロサンゼルス五輪、1936年ベルリン五輪・馬術、1945年没）、③ SIGEO ARAI/ 新井茂雄（1936年ベルリン五輪・水泳、1944年没）、④ SABURO ITO/ 伊藤三郎（1936年ベルリン五輪・水泳、1942年没）、⑤ REIZO KOIKE/ 小池禮三（1932年ロサンゼルス五輪、1936年ベルリン五輪・水泳、1942年没）。

大江、西、新井の3人は、大島が作成した名簿にも名前はあるが、伊藤と小池に関しては記載がない。それは当然のことで、伊藤と小池は、戦後も日本水泳界の発展に長きにわたって貢献した人物だからである[26]。つまり、現在ベルリンにある「世界戦没オリンピアン」の日本人リストには、「戦没者」ではないオリンピアンが記載されていたのである。では、なぜ伊藤や小池の名前が戦没者名簿に記録されていたのか。そして誰がいつ、5人の日本人戦没者リストをベルリンに持ち込んだのだろうか。

表4 「世界戦没オリンピアン」名簿に記載のある国と人数

国　名	戦没オリンピアン数
ドイツ	91
イタリア	2
日本	5
フィンランド	14
アメリカ	4
ハンガリー	11
ポーランド	4
イギリス	3
フランス	2
イスラエル	11
オーストリア	14
合　　計	161

【ベルリン・スポーツ博物館所有名簿より筆者作成】

4. 大島鎌吉とハンス・フリッチの関係

前述した戦没オリンピアンの名簿をめぐる疑問は、根拠となる文献が不十分なこともあり、本稿ですべ

てを明らかにすることは困難であった。しかしシュタインズへの聞き取り調査[23]で得られた証言から、以下の4点が明らかになった。①大島は戦没オリンピアン名の収集活動に努めたハンス・フリッチの友人であり、大島が日本から30人の戦没者名簿をベルリンに届けたのであれば、フリッチに届けている。しかしそれはベルリンではなく、フリッチと面会したオイティン市で手渡しているはずだ。なぜならオイティン市には大島と親交のあったジーフェルトの墓があり、大島は「ジーフェルト賞」の授賞式の際に、ジーフェルトの墓参りを兼ねてオイティン市を訪れているからである。②大島が名簿をベルリンに持参したのであれば、ベルリンのスポーツ博物館あるいはオリンピック公園のどこかに名簿が残っているはずだが、当博物館には見あたらない。③フリッチの死後にシュタインズが遺品を譲り受けているが、その中に日本からの名簿はなかった。フリッチは大島からオイティン市で名簿を受け取った後、何らかの理由で紛失した可能性が高い。④外国人を最初に加えた名簿は当初128人だったが、2015年現在では冬季五輪選手を含め161人が記載されている。そのうち日本人は5人である。現在の日本人戦没者の名前が、誰によって持ち込まれたのかは不明である。

以上の証言内容から思料すれば、大島がベルリンに持参した日本人戦没オリンピアンの名簿は、ハンス・フリッチが大島から直接受け取った可能性が高い。しかし現在、大島の作成名簿はベルリンのスポーツ博物館にも残っておらず、また5人の日本人戦没者リストには受理した年月日が記されていないため、誰によって持ち込まれたのかを探す手がかりがなく、明らかにできないままとなった。

Ⅳ．日本人戦没オリンピアン名をめぐる混乱

1．混乱の真相

これまでの日本人戦没オリンピアンに関する主な名簿（リスト）を整理すると、戦没オリンピアン名をめぐっては、以下の2点において相違があった。1点目は、大島の作成した戦没オリンピアン名（1982年）と、1964年に靖国神社で展示された「オリンピック関係戦没者遺品展」のリスト（1964年）が一部で異なっていること。2点目は、大島がドイツに届けた戦没オリンピアン名簿と、ベルリン・スポーツ博物館が所有している「世界戦没オリンピアン」の名簿が異なっていることである。

まず1点目の相違だが、大島が名簿に記載しなかったオリンピアンは、いかなる基準によって名簿から削除したのか。その大島の意図を探るためには、2008年に開催された昭和館特別企画展の図録（以下、図録）に記載されている「戦没オリンピック選手リスト」（秩父宮記念スポーツ博物館作成）との比較が解明の手がかりになる。図録では「戦没者リスト」（三上孝道 監修ほか 2008:38）として35人の戦没オリンピアン（1998年4月現在判明）が記載されている。この図録と大島の作成名簿の主な違いは、以下の3点にある。①大島の作成名簿に記載があった村山又芳（ロサンゼルス五輪・ボート出場）の名前が、図録にはない。②大島の作成名簿には、高野重機（陸上監督・総務役員）の死因は「甲府市空襲」となっていたが、図録では「不明」となっている（靖国神社の遺品リストには、高野は「陸上監督」として参加しているため記載されていない）。③大島の作成名簿と図録のリストに記載されている脇坂貞雄（ホッケー）は、靖国神社の遺品リストに載っていない（遺品が出品されなかったことも考えられる）。

大島の作成名簿の特徴は、国内で死亡した横山や高橋は記載していないが、「日本で病死」した村山は名簿に含めていることである。大島はベルリンに持参する名簿を作成する際には遺族に電話で確認をとっており、村山のように「日本で病死」したケースでも、戦争が原因で死亡したことが判明した場合には、戦没オリンピアンとして名簿に記載した可能性がある。それというのも、例えば中村英一（1932年ロサンゼルス五輪・ホッケー代表）は、図録では「内地で戦死」と書かれているが、大島の名簿には具体的に「東京空襲」と記されている。当時、村山も中村も遺族の所在地がわかっており、大島は遺族に確認した上で詳しい死因を記載し、一方、「病死」の原因が確認できなかった場合には名簿から削除したことが考えられる。上述したように、大島の作成名簿には、国内で「病死・事故死」した横山や高橋、また大沢のように「従軍中に病死」したケースも含めていない。つまり大島が名簿に記載しなかったオリンピアンの「死因」には、病死・事故死など一定の整合性があり、「未確認」や「見落とし」[27]以外の理由があることが考えられる。

その根拠としては、1963年に死亡したオリンピ

アンの扱いにみてとれる。大島が作成した戦没オリンピアン名が朝日新聞（1984年7月27日）に掲載された後、その記事を読んだ遺族から新聞社に連絡が入り、新たな戦没オリンピアンが判明した。その際に、大島は取材に答えて「他にも原爆で亡くなった選手の情報があり（略）」（朝日新聞1984年8月11日）とコメントを出している。大島が話した「原爆で亡くなった五輪選手」とは、ベルリン五輪に大島と共に出場して以来、親しくしていた広島出身の高田静雄（1936年ベルリン五輪・陸上砲丸投げ出場）だった。高田は広島で被爆してからは、体の自由がきかず半身不随の状態が続いていたが、1963年秋に白血病で亡くなっている[28]。大島がベルリンに日本人戦没者名簿を持参した時点で高田はすでに死亡していたが、大島は高田の名前を名簿に記載していない。

ではなぜ大島は、戦没オリンピアンの名簿に高田を加えたいという意向を新聞社に伝えたのであろうか。大島は1982年にビュッティコッファー会長から手紙を受け取った際に、「台座に刻印されるオリンピック選手は第二次世界大戦の戦没者のほか、テロや動乱などで死んだ人たち」（朝日新聞 1982年5月9日）と伝えられていたが、大島は高田の死因（国内で病死）が「戦没オリンピアン」の条件（基準）に当てはまらないと考え、その対象から外したことが気がかりだったと推測する。大島は、コッファー会長から手紙で「戦没オリンピアン」の条件を聞いていたが、名簿を作成する際には、その基準が曖昧になっていたことが考えられる。

以上のことから考量すれば、日本人戦没オリンピアン名をめぐる混乱の背景には、わが国には「『戦没オリンピアン』とはなにか」といった明確な定義がなく、調査主体者に委ねられたまま名簿やリストが作成されてきたり、また大島の作成名簿も「戦没オリンピアン」の基準が曖昧になっていたりしたことが、戦没オリンピアン名をめぐる混乱のベースにあるのではないか。

そして、2点目の大島の作成名簿とベルリン・スポーツ博物館が所有している「世界戦没オリンピアン」名簿との相違だが、人数のみならず一部で名前も違っていた。ベルリンのスポーツ博物館では、筆者らが日本人戦没者の名前が違うことを指摘した際に、「世界戦没オリンピアン」のリストが間違っていることに初めて気がついた。そもそもドイツでは、当初把握していた「世界戦没オリンピアン」（24ヵ国283人）の名簿や、大島がドイツに持参した30人の戦没者名簿を紛失しており、戦没者リストを受理した年月日を明記していないことも混乱を引き起こす原因となっていた。

2. 「戦没オリンピアン」の定義

では、「戦没オリンピアン」をどのように定義したらよいのであろうか。「戦没オリンピアン」の追悼式がベルリンで行われるようになり、世界戦没オリンピアンの名前が集められた際に、ドイツでは「戦没オリンピアン」をいかに定義していたのか。ベルリンのスポーツ博物館では、戦没オリンピアンを「戦争と暴力によって亡くなったオリンピック選手」[29]としている。実際に、ベルリン・スポーツ博物館の戦没オリンピアン名簿には、1972年ミュンヘン五輪開催中に選手村でテロ集団の襲撃にあったイスラエルの選手・役員11人の名前も、死亡日が1972年9月5日で記されている。この名簿を見る限りでは、役員も「オリンピアン」として記載している。

世界戦没オリンピアンの名簿を管理するシュタインズによれば、「『暴力』で殺されたとは、罪がなく理不尽に殺された人のことであり、例えば1972年頃にアメリカで強盗に殺された選手も含まれる」[30]と言う。日本ではナチスの暴力支配下で亡くなったオリンピアンがいないこともあり、1982年に大島が名簿を作成した当時の日本で「戦没オリンピアン」といえば、「従軍し外地または内地において戦争が原因で死亡した五輪選手」を想定していたことが考えられる。そうであるならば、大島が名簿を作成する際に、戦時中の「病死」「事故死」また「原爆の後遺症」で亡くなったオリンピアンを、名簿から削除していたとしても不思議ではない。また前述した1972年ミュンヘン五輪の例から、陸上監督として1936年のベルリン五輪に参加した高野の名前が、大島の名簿に記載されていたことにも違和感はない。

今後、わが国で新たな日本人戦没オリンピアンの名簿を作成するためには、「戦没オリンピアン」の定義が必要になる。その基準としては、ドイツが定めている「世界戦没オリンピアン」の定義に合わせて名簿を作成することを、筆者らは提案したい。なぜならばベルリン・スポーツ博物館では2018年から2020年までに、世界戦没オリンピアンの名前をアーカイブ化することを検討している。「ベルリン

にある日本人戦没オリンピアンの更新された名簿をぜひ頂きたい」[23]との要望もある。また大島とハンス・フリッチが目指した「世界戦没オリンピアン」の追悼のためにも、筆者らは日本もドイツの基準に統一していくことが望ましいと考える。すなわち「戦没オリンピアンとは、『戦争や暴力によって亡くなったオリンピック選手』」と定義し、これまでの日本の調査を見直すと、戦没オリンピアン名の混乱は解消されるのである。また、原爆の後遺症で亡くなったオリンピアンを、日本人戦没オリンピアンの名簿に新たに加えることは、核廃絶、原水爆禁止などの平和運動に尽力した大島がもっとも願っていたことであり、大島の意志を受け継ぐ試みの一つになると筆者らは考えるからである。

3. 大島鎌吉の作成名簿の更新

表5は、日本人「戦没オリンピアン」を「戦争や暴力で亡くなったオリンピック選手」と定義し直したうえで、大島がベルリンに届けた30人の「日本人戦没オリンピアン」名簿に、新たに判明した戦没者を含め、より正確なものに更新したものである(2016年3月現在)。「戦死時」の年齢が調査によって異なっている場合は（例えば脇坂など)、当時の新聞記事を参考にしてできる限り正確に記載した。また「戦死時」の年齢が各調査で「不明」となっているオリンピアンは、大学卒業年やオリンピック代表になった年の新聞に掲載された年齢を参考にしたため、「推定」とした。なお、日本が戦争で返上した「1940年東京五輪」の代表候補選手となった、水泳の越戸雄一（1945年5月26日、フィリピンで戦死）は含めていない[31]。

朝日新聞には「『戦没オリンピアン』に該当しそうな戦前の五輪選手は、夏が6大会で389人、冬が3大会で57人」(1993年3月26日）とある。「該当しそうな戦前の」とは、戦争で亡くなったことが前提となっているが、実際には戦後に国内で（戦争が原因で)「病死」したオリンピアンも含まれる。また今日では世界中でテロリストなどによる無差別殺人が起きており、日本人が巻き込まれるケースもでてきている。従って新たな戦没者名簿を作成する際には、日本もドイツと同様の「戦没オリンピアン」の定義を使用することが現実的ではないだろうか。

V. おわりに

わが国では、夏季五輪において1912年ストックホルム五輪に参加してから2012年ロンドン五輪までに、男女の選手・役員他を合わせて5,737人（モスクワ五輪代表選手を除く）がオリンピックに参加し、そのうち選手は3,953人となっている。冬季五

表5　日本人戦没オリンピアン（2016年3月現在）

	氏　名	出場五輪	競技	出場種目と成績	出身大学	戦死日	戦死時の年齢	戦死場所	結婚歴	その他(軍籍ほか)
1	相沢　巌夫	アムステルダム	陸上	100、200 m予選落ち	京都大学	1945年10月	41	ルソン島（ニュー・ビリットでマラリアの為病死）	既婚	陸軍司政官
2	落合　正義	ロサンゼルス	陸上	ハンマー投・12位	明治大学	1939年12月	30	中国／北支（河南省）	独身	陸軍上等兵
3	長尾　三郎	ロサンゼルス	陸上	槍投・10位	関西大学	1943年11月	33	中部ニューギニア	既婚	陸軍伍長
4	阿武　巌夫	ロサンゼルス	陸上	400 mリレー・5位	慶応義塾大学→中大へ	1939年12月	31	中国／南支（広西省）	既婚	陸軍上等兵
5	大江　季雄	ベルリン	陸上	棒高跳・3位	慶応義塾大学	1941年12月	28	ルソン島	独身	陸軍少尉
6	高野　重幾	ベルリン	陸上	陸上監督	明治大学	1945年 7月	37	甲府市空襲	既婚	不明
7	鈴木　房重	ベルリン	陸上	出場せず	日本大学	1945年 6月	31	ルソン島	既婚	陸軍伍長
8	谷口　睦生	ベルリン	陸上	200my予選失格	関西大学	1943年10月	30	ブーゲンビル島	独身	陸軍中尉
9	鈴木　聞多	ベルリン	陸上	400 mリレー失格	慶応義塾大学	1939年 7月	27	中国／北支（河南省）	独身	陸軍少尉
10	内田　正練	アントワープ	水泳	100m自由形予選失格	北海道大学	1945年 2月	47	ニューギニア	既婚	海軍司令官
11	斎藤　魏洋	パリ	水泳	100m背泳ぎ決勝欠場	立教大学	1944年 9月	41	マニラ（デング熱後の肺炎か）	既婚	報道班員
12	武村　寅雄	ロサンゼルス	水泳	出場せず	明治大学	1945年 7月	31	ミンダナオ島	既婚	陸軍兵長
13	石田　英勝	ロサンゼルス	水泳	高飛び込み8位	慶応義塾大学	1945年 2月	36	フィリピン	独身	陸軍特務飛行隊員
14	河石　達吾	ロサンゼルス	水泳	100m自由形2位	慶應義塾大学	1945年 3月	33	硫黄島	既婚	陸軍大尉
15	吉田　喜一	ベルリン	水泳	100m背泳5位	早稲田大学	1944年12月	26	ミンダナオ島	独身	陸軍中尉
16	児島　泰彦	ベルリン	水泳	100m背泳6位	慶應義塾大学	1945年 6月	26	沖縄方面	独身	海軍主計少佐
17	田中　一男	ベルリン	水泳	出場せず	早稲田大学	1945年 3月	30	ニューギニア	独身	海軍兵長

18	新井　茂雄	ベルリン	水泳	800m リレー優勝 100m 自由形 3 位	立教大学	1944年 8月	26	インパール（ビルマ方面）	既婚	陸軍中尉
19	中村　英一	ロサンゼルス	ﾎｯｹｰ	2 位	慶応義塾大学	1945年 5月	36	東京空襲	既婚	陸軍准尉
20	柴田　勝巳	ロサンゼルス	ﾎｯｹｰ	2 位	東京商科大学 （一橋大）	1942年 8月	34	中国 / 北支（河南省）	既婚	陸軍兵長
21	脇坂　貞雄	ベルリン	ﾎｯｹｰ	5 位	東京商科大学 （一橋大）	1941年 4月	30	フィリピン	独身	不明
22	竹内　悌三	ベルリン	ｻｯｶｰ	2 回戦敗退	帝国大学 （東京大学）	1946年 4月	37	シベリア （アムール州で戦病死）	既婚	陸軍主計少尉 （1908 年 11 月 6 日生）
23	松永　行	ベルリン	ｻｯｶｰ	2 回戦敗退	東京高等師範 （筑波大学）	1943年 1月	29 （推定）	ガダルカナル島	独身	陸軍大尉（1936 年 4 月 23 日時点で 23 歳）
24	右近徳太郎	ベルリン	ｻｯｶｰ	2 回戦敗退	慶応義塾大学	1944年 3月	31	ブーゲンビル島	既婚	陸軍兵長
25	斎藤　盈夫	ロサンゼルス	ボート	エイト予選失格	早稲田大学	1939年 5月	29	中国 / 北支（河南省）	既婚	陸軍少尉
26	村山　又芳	ロサンゼルス	ボート	敗者復活戦敗退	慶応義塾大学	1945年 5月	32	日本で病死	既婚	不明
27	満留　　勉	ベルリン	ボート	舵付きペア敗者復活戦敗退	早稲田大学	1945年 6月	31	沖縄	独身	陸軍大尉
27	西　　竹一	ロサンゼルス ベルリン	馬術	ロス 大障害飛越 1 位 ベルリン 総合馬術個人 12 位	陸軍騎兵学校	1945年 3月	42	硫黄島	既婚	陸軍大佐
29	吉本　善多	ベルリン	ｾｰﾘﾝｸﾞ	出場せず	同志社大学	1944年 5月	29	ビルマ・インパール	既婚	陸軍伍長
30	有本　彦六	ベルリン	体操	団体 9 位、個人 54 位	日本体育会体操学校 （日本体育大学）	1945年 5月	30	東シナ海	既婚	陸軍中尉
31	横山　隆志	ロサンゼルス	水泳	800m リレー優勝、 400m 自由形 4 位	早稲田大学	1945年	33	国内で戦病死	既婚	陸軍二等兵
32	前田　倍三	ベルリン	水泳	水球（予選敗退）	早稲田大学	1943年 8月	27 （推定）	ソロモン諸島	不明	1936 年 6 月 1 日時点で 23 歳
33	大沢　政代	ベルリン	水泳	高飛び込み 6 位	九段精華高女 （精華女子高校）	1945年 1月	32	中国 / 奉天（瀋陽市）で戦病死	既婚	陸軍軍属
34	高橋　豊二	ベルリン	ｻｯｶｰ	出場機会なし	帝国大学 （東京大学）	1940年 3月	26	国内で飛行中殉職	不明	海軍飛行予備学生 （1913 年生まれ、月日不明）
35	若山　滝美	ベルリン	水泳	水球（予選敗退）	早稲田大学	1941年 9月	27 （推定）	中国で病死 （腸チフス）	既婚	1936 年 6 月 1 日時点で 23 歳、陸軍主計大尉
36	木谷　徳雄	レークプラシッド 冬季大会	ｽｹｰﾄ	スピード（予選敗退）	満州国・ 大和学校	1947年 1月	38	旧ソ連チタ州収容所で病死	既婚	不明 / 南満州鉄道（満鉄）
37	高田　静雄	ベルリン	陸上	砲丸投げ（予選失格）	旧制広島広陵中学中退	1963年 秋	54	被爆による後遺症 （白血病）	既婚	不明

【筆者作成】

輪においては、1928 年サン・モリッツ五輪から 2014 年ソチ五輪までに、選手・役員他を合わせて 2,226 人が参加し、そのうち選手は 1,237 人である。一方で終戦を迎えた 1945 年まででは、夏季五輪、冬季五輪を合わせ計 446 人がオリンピック参加者となっている[32]。筆者らの調査では、そのうち男女合わせて 36 人の戦没オリンピアン名が明らかになった。これに戦後亡くなった高田を加えると合計で 37 人となり、大島がベルリンに持参した名簿には、新たに 7 人の戦没オリンピアンが追加されることになった。

今回の調査研究によって、戦没オリンピアン名の「平和の鐘」台座刻印の事実や、日本人戦没オリンピアン名をめぐる混乱の背景とその真相が明らかになり、「戦没オリンピアン」の定義の必要性がわかった。そして新たに定義したことにより、大島がドイツに届けた日本人戦没オリンピアンの名簿を更新することが可能となった。

おわりに、本研究の限界と課題を指摘しておきたい。今後も従軍したことが原因で戦後に病死したオリンピアンや、表 5 で「不明」となっている箇所が明らかになる可能性があり、名簿は完成されたとはいえない。戦後 70 年が過ぎ遺族などが亡くなったり、高齢化したりする中で情報の入手はますます困難な状況に置かれつつある。今後は本稿がきっかけとなり、埋もれていた戦没オリンピアンに関する情報の出現が期待される。更に検討が必要なことは、これまでに戦争で開催されなかった五輪[33]や、その他の事情（例えばボイコットなど）で五輪の代表候補になっても、実際に参加できなかったオリンピア

ンの扱いである。ドイツの「世界戦没オリンピアン」のリストを確認すると、過去に返上または中止された年の代表候補は入っていない。しかし何らかの別の形で日本独自の名簿作成を検討し、我々の記憶に留めていく必要があるのではないだろうか。

そして、ＪＯＣのホームページに日本の「歴代オリンピック代表選手」として記載のない、高野（陸上監督）の扱いについても検討が必要である。高野に関しては、1972 年ミュンヘン五輪で殺された役員の扱いと同様に「戦没オリンピアン」として加えたが、実際には選手ではないため「オリンピック代表選手・役員ほか」としたほうが正確だろう。しかしこれには、「世界戦没オリンピアン」名簿を管理しているベルリン・スポーツ博物館との合意が必要である。また 1936 年ベルリン五輪代表の吉本善多の出場種目は、大島の作成名簿、靖国神社の戦没者遺品リスト、昭和館特別企画展の図録、出身校である同志社大学の関連書物に「ヨット」と記載されているが、正式には「セーリング」である。表５ではこれらの修正を含めて、37 人の日本人戦没オリンピアンを掲載した。

大島鎌吉が人生を通して目指したオリンピズムの目標は、「スポーツを人類の調和のとれた発達に役立てることにあり、その目的は人間の尊厳保持に重きを置く、平和な社会を推進していくことにある」[34]。大島は日本が 1980 年モスクワ五輪のボイコットを表明した際に、先頭に立って反対運動を展開し、また「1982 年の日本の反核三千万人署名活動」に参画している。いずれも大島は「日本オリンピック委員へ『率先すべき』と提議したが（中略）理事会でスポーツは政治にかかわるべきではない」（伴 2014:72）と言う理由で否決された。しかし、2015 年に被爆 70 年を迎えた広島にとって、また 2020 年東京五輪開催を前にして、大島が力を注いだスポーツを通した平和活動やスポーツ界の「自立」は、今後ますます必要なものになるのではないだろうか。

1964 年東京五輪の直前に開催された靖国神社の戦没オリンピアン遺品展では、「戦争でたおれた元選手の過去をしのぶのも、いまのわたしたちに十分な意味があるのではないか」（読売新聞 1964 年 9 月 28 日）と開催意義が記されている。大島がベルリンに届けた「日本人戦没オリンピアン名簿」を更新するという本研究の試みは、大島の「オリンピックと平和活動」を再考するうえでも、重要な意味を持つと筆者らは考える。

謝辞

本研究を進めるにあたっては、織田正雄氏（元ベルリン日独センター次長）、坂戸勝氏（日独センター副事務総長）、Dr. Hannelore Hegel（元ベルリン市職員）、Dr. Gerd Steins（ベルリン・スポーツ博物館振興協会代表）に、ご協力ならびに貴重な情報や資料を提供して頂いた。ここに記して心から謝意を表する。

注

1　大島鎌吉（1908-1986）石川県金沢市生まれ、関西大学卒、1932年ロサンゼルス五輪陸上男子三段跳銅メダル、1936年ベルリン五輪（三段跳）6位入賞。毎日新聞ベルリン特派員、東京本社政治部記者、運動部次長などを経て1959年ＪＯＣ委員、1964年東京五輪日本選手団団長、大阪体育大学副学長などを歴任。1982年にオリンピック平和賞、功労賞を受賞している（日外アソシエーツ、1990：90）。

2　例えば近年では、岡（2013）や毎日新聞運動部の滝口隆司編集委員が本紙に連載した「五輪の哲人・大島鎌吉物語」（2014年11月4日-12月20日：東京朝刊）などがある。

3　毎日新聞（2014年12月18日）「戦後70年に向けて・五輪の哲人：大島鎌吉物語/33　尽きぬ思い、旧友と」:東京朝刊。

4　「大島鎌吉」研究の第一人者である伴義孝は、川本信正の記事（読売新聞 1985年4月21日）にある大島の3つの功績（①ドイツとの交流を介した日本スポーツ少年団の設立、②東京五輪に際し日本のスポーツ科学振興の土台づくり、③核廃絶反戦平和運動）を引用し、最大の功績は上述した③だったことを「確かに一つの見方である」（伴 2014：72）と同意している。

5　大島は世界で11人目となる「ジーフェルト賞」を受賞した際に、毎日新聞（1982年6月9日）の取材に答えて「世界の若者たちが交流し、友達になることの影響は、はかり知れない。戦争になっても友達を銃砲でなんか撃てませんよ」と話している。

6　フィリップ・ノエル=ベーカー（Philip John Noel-Baker:1889-1982）はイギリス生まれ、ソルボンヌ大学（パリ）、ミュンヘン大学（ドイツ）に留学、ケンブ

リッジ大学キングスカレッジ（イギリス）で4年間経済学、国際法を学ぶ。1912年オリンピック・ストックホルム大会男子1,500mイギリス代表（6位入賞）、1920年アントワープ大会1,500m銀メダル、1924年パリ大会代表、英国チーム主将。1959年ノーベル平和賞受賞。1980年に「原水禁1980年世界大会広島集会」に出席した際、大島とは東京の青少年会館で面会し対談している。詳細は内海（2011、2012）、岡（2013）を参照されたい。

7　カール・ディーム（Carl Diem:1982−1962）はドイツ・ヴュルツブルク生まれ。1903年にドイツ競技者スポーツ連盟の執行部に参加、1908年から1913年まで会長を務める。各種スポーツ大会の主催、スポーツ・ジャーナリストとしての執筆活動、スポーツ政策の立案、1936年ベルリン五輪大会事務局長、ケルン・スポーツ大学初代学長などを務め、「20世紀前半のドイツを代表する体育・スポーツのイデオローグ」（釜崎 2008:88）といわれている。大島とカール・ディームは「オリンピックが世界を結ぶ平和運動になる（オリンピズム）」という信念を共有し、戦後は親交を深めていった。大島のカール・ディームに関しての著書、訳書は多数ある（例えば大島鎌吉〈1955〉「カール・ディーム博士の人と業績」体育の科学・日本体育学会編、第5巻11・12号、杏林書院：426-430）など。

8　ベルノ・ウイッシュマン（Berno Wischmann：1910-2001）は、マインツ大学の教授であり、西ドイツの陸上界をコーチとして長い間率いてきた。1984年にウイッシュマンが来日した際、大島は癌の手術を受け入院中で闘病生活を送っていたが、病院を出て自宅にウイッシュマンを招待するほど親しい仲だった（毎日新聞 2014年12月18日）。

9　賞の名前となっているハンス−ハインリッヒ・ジーフェルト（Hans-Heinrich Sievert：1909-1963）は、1936年ベルリン五輪・陸上十種競技金メダリスト。戦後は西ドイツ内務省家庭・青少年・スポーツ局長としてドイツのスポーツ振興・復興に貢献した。「オリンピック平和賞」の公式名称は「ハンス−ハインリッヒ・ジーフェルト賞」と呼ばれ、彼の功績を称えて制定されたもので、青少教育や国際交流を推進した人に贈られた賞である。大島とジーフェルトは、1932年ロサンゼルス五輪の選手村で知り知り合って以来、クリスマスカードを交わすなどの深い交流が長く続いた（毎日新聞 1982年6月9日）。ちなみに大島のジーフェルト賞への推薦状を書いたのは、大島と旧知の間柄だったウイッシュマン博士だったといわれている（毎日新聞 2014年12月18日）。

10　この名簿作りのために、「大島は連日のように名簿を頼りに受話器を握り、30人の日本人戦没オリンピアンの遺族を探し、間違いのない戦没者名簿をドイツに届け、（中略）」（岡 2013：289）とある。

11　ハンス・フリッチ（Hans Fritsch：1911−1987）は、1936年ベルリン五輪の西ドイツ選手団の旗手を務め、陸上競技（円盤投げ）に出場したが45m10cmの記録で11位に終わっている。1940〜1945年にはハインリッヒの空軍に在籍し、戦後は五輪参加者国際協会副会長としてドイツの戦没者追悼活動を推進。その活動の中で戦没したオリンピアンの名前を残そうと奔走した。

12　記事の中では、「戦火に散ったオリンピアン名簿『平和の鐘』に日本の 30 人」として戦没オリンピアン名が掲載されている。ただし当該記事には、大島が戦没選手名簿を作成し持参したとは書かれていない。

13　ベルリンのスポーツ博物館のゲルト・シュタインズ（Steins, Gerd）氏から提供を受けた記事と写真（『平和の鐘』の記念シンボルについて）の中では、1982 年 11 月の時点で台座は存在していたことが確認できる。しかし後述するように、当時も台座に戦没オリンピアンの名前は刻まれていない。その後 2005 年 12 月の写真では台座は置かれていなかった。

14　その他、朝日新聞（1984 年 8 月 11 日）の「ベルリン五輪『平和の鐘』レコード保存」）の記事にも、「平和の鐘の台座には 24 ヵ国 283 人のオリンピック選手の名前が刻まれ」とあり、毎日新聞（2000 年 11 月 30 日）「萩市住民が伝記を出版へ 県初の五輪出場・故阿武厳夫選手を顕彰：地方版／山口」にも、「平和の鐘」の台座に「戦没オリンピアン」の一人として阿武選手の名前が「刻まれた」とある。

15　事前調査は、元ベルリン日独センター次長であり、ドイツ連邦功労賞を受賞された織田正雄氏（アムステルダム五輪金メダリスト織田幹雄氏の長男）を通じて、元 JDZB（Japanisch-Deutsches Zentrum Berlin）のベルリン市当局側の責任者の一人であったヘーゲル（Dr. Hannelore Hegel）氏に依頼した。調査はベルリンのスポーツ博物館代表のスタインズ（Steins, Gerd）氏に対して問い合わせがなされ、結果はヘーゲル氏から e-mail で織田正雄氏に回答（2015 年 10 月 7 日付）があり、筆者らに転送された。

16　ベルリン・スポーツ博物館から提供のあった日本人戦没者のリストは、ヘーゲル氏から織田氏に送られたメールの中に 5 人の名前と簡単なプロフィールが書かれていた。これは後に筆者らが現地調査の際に、スタインズ氏

から受け取った「世界戦没オリンピアン」名簿から日本人を抜粋したものであることがわかった。

17　大島がベルリンに届けた戦没オリンピアン名簿は、現在、日本にもベルリンにも残っていない（詳細は表2で後述）。また筆者らはＪＯＣ、日本体育協会、NPO法人日本オリンピアンズ協会に問い合わせをしたが、1956年、1964年当時の調査資料は残されていなかった。

18　若山選手は「東京オリンピック当時の日本体育協会調査で『病死』となっていたため、そのまま見逃されたものらしい」と記事には書かれてある（朝日新聞 1984年8月11日）。

19　朝日新聞（1993年3月26日）の記事に「戦没五輪選手、また一人　スケートの初陣の木谷徳雄さん　ＪＯＣ調査」とあり、1956年にＪＯＣが調査していることがわかった。

20　毎日新聞（1992年12月17日）によれば、ＪＯＣが把握していた戦没者は、この時点で33名だった。

21　大沢は軍属として召集され、孫呉兵器廠で戦病死している（読売新聞 1964年9月28日）。

22　遺品展の選手リストには、31人の「最終学歴」「出場五輪名と競技･種目名」「戦死日」「戦死場所と死因」「戦死時の階級」などが記載されている（読売新聞 1964年9月28日）。

23　筆者らは「世界戦没オリンピアンの名簿」について調査するため、ベルリンのスポーツ博物館事務所を直接訪問した。聞き取り調査の日時は、2015年11月26日10：00～11：00。調査対象者はドイツベルリンスポーツ歴史フォーラム・スポーツ博物館振興協会代表シュタインズ氏（Gerd, Steins）で、他に事務局職員のブッチ（Christina, Buch M.A）氏が同席した。調査内容は主に以下の点に関して事前にメールで伝えていた。①「世界戦没オリンピアン」の名簿の閲覧、②戦没オリンピアン名の「平和の鐘」の台座刻印に関して、③ハンス・フリッチに関して、④大島がベルリンに持参した「日本人戦没オリンピアン」の名簿の所在についてなどである。

24　当時の「ドイツ戦没者墓地管理委員会」の会長ハンス･ビュッティコッファーは、世界の戦没オリンピアン追悼の件で、大島に手紙を送っている（朝日新聞 1982年5月9日）。

25　ベルリン･スポーツ博物館の「世界戦没オリンピアン」の名簿は、大きさが縦54.5ｃｍ×横44.5ｃｍですべて手書きとなっている（死亡年順ではなくアルファベット順に記載）。名簿には「氏名」「出場年とオリンピック名」「競技種目」「戦没年」が書かれている。スタインズ氏によれば「本来ならドイツ人犠牲者の後に世界の戦没オリンピアンの名前を記載すべきだが、追加があるたびにアルファベット順にすべてを書き換えなくてはならない。手書きのリストを1枚作るのに500ユーロ（1頁）かかるので、名簿への追加は予算の関係で現在はペンディングとなっている」[23]と話している。筆者らが現地で受け取ったリストの内容は、現物の名簿と同じであり、ドイツ語で表記されたＡ4版6枚の紙にタイプされたものを受け取った。なお、戦没者名が受理された年月日は記載されていなかった。

26　小池と伊藤は、共に静岡県出身であり水泳選手であったことから、静岡県水泳連盟名誉会長の高井平八に聞き取り調査をした。調査は、2015年12月25日10：30～11：30に静岡市内のホテルで実施した。高井は1928年生まれで、インタビューの時点では87歳。元日本水泳連盟会長の故･古橋広之進とは同い年､同郷（静岡県出身）のスイマーだった。小池、伊藤の両選手に関しては、高井に調査をお願いした。小池禮三（1926-1998）は、沼津市出身、1932年ロスアンゼルス五輪2位、1936年ベルリン五輪3位、1998年8月3日肺小細胞ガンで病死（72歳）。元日本水泳連盟専務理事。1941に戦時中に香港島に泳いで一番乗りを果たしたというエピソードが一部で語られてきたが、これは間違いであった。伊藤三郎（1915-1974）は、静岡県磐田市出身、1936年ベルリン五輪5位､1974年埼玉県川口市で腎臓ガンにより病死〈60歳〉。元埼玉県水泳連盟副会長。

27　大島の作成名簿には、木谷徳雄（1932年冬季五輪レークプラシッド大会・スケート代表）の名前が記されていない。これは後にＪＯＣが「木谷さんは『病死』となっており、そのまま今日まで見逃されたらしい。」（朝日新聞 1993年3月26日）とコメントしている。冬季五輪の戦没オリンピアンについては、そもそもＪＯＣ、日本体育協会及び大島自身も情報を把握していなかったことが考えられる。木谷に関する情報は、1993年にＪＯＣが取り組んでいた戦没オリンピアンの調査を知った東京都スケート連盟会長の南邦夫が、尼崎市内に住む夫人を探して直接確認した結果、旧ソ連チタ州収容所で肺炎ために亡くなったことがわかり、「戦病死」として新たに「戦没オリンピアン」のリストに加えられた（朝日新聞 1993年3月26日）。

28　中国新聞（1964年10月6日）には、「故砲丸王の遺影が入場行進五輪開会式 大島団長に抱かれ…実った“親友の誓い”」の記事が掲載されている。高田は晩年、被爆の影響で闘病生活を続けていた。

29 「vom Krieg und Gewalt getöteten Olympiateilnehmer」（Gemeinschaft der Olympiateilnehmer – Olympian International e.V.1981）。

30 筆者らの聞き取り調査では、「原爆の後遺症で亡くなったオリンピアンも〝戦没オリンピアン〟に入る」[23]いうコメントがあった。

31 ちなみにベルリン・スポーツ博物館の「世界戦没オリンピアン」名簿にも、「1940年東京五輪」の代表候補で、戦没したオリンピアンは記載されていなかった。

32 公益財団法人日本オリンピック委員会ホームページ、［http://www.joc.or.jp］（閲覧日：2016年3月31日）。

33 これまでに戦争で開催されなかったオリンピックは、1916年第6回ベルリン五輪（中止）、1940年第12回東京五輪（返上）、1944年第13回ロンドン五輪（中止）だが、1948年ロンドン五輪は、日本は敗戦国だったため参加を認められなかった。

34 国際オリンピック委員会（2011年7月8日施行）「オリンピック憲章『オリンピズムの根本原則』」、公益財団法人日本オリンピック委員会［http://www.joc.or.jp］（閲覧日：2016年3月31日）。

参考文献

朝日新聞（1982年5月9日）「『平和の鐘』の下に集う 台座に名前刻む 不戦の象徴に計画 日本人24人も」：朝刊。

朝日新聞（1984年7月27日）「戦火に散ったオリンピアン名簿 『平和の鐘』に日本の30人」：東京夕刊。

朝日新聞（1984年8月11日）「ベルリン五輪『平和の鐘』レコード保存」「水球の夫 戦火に散った」：朝刊。

朝日新聞（1993年3月26日）「戦没五輪選手、また一人 スケート初陣木谷徳雄さん ＪＯＣ調査」：朝刊。

伴義孝（2014）大島鎌吉のスポーツ思想に学ぶ－脱近代化志向の身体文化という視点において－、人体科学23-(1)〈評論〉：61-75。

中国新聞（1964年10月6日）「故砲丸王の遺影が入場行進 大島団長に抱かれ 実った〝親友の誓い〟」：朝刊。

Gemeinschaft der Olympiateilnehmer – Olympian International e.V. (1983): Olympiakämpfer: Mitteilungsblatt der Gemeinschaft der Olympiateilnehmer – Olympian International e.V. In: Sonderdruck aus “Olympisches Feuer”, Heft 6 Nov./Dez.

Gemeinschaft der Olympiateilnehmer – Olympian International e.V. (1981): Olympiakämpfer: Mitteilungsblatt der Gemeinschaft der Olympiateilnehmer – Olympian International e.V. In: Sonderdruck aus “Olympisches Feuer”, Heft Dezember.

釜崎太（2008）カール・ディームの「スポーツ教育」論にみる「身体」と「権力」、弘前大学教育学部紀要第99号：87-105。

毎日新聞（1982年6月9日）「『人』大島鎌吉」：朝刊。

毎日新聞（2000年11月30日）「萩市住民が伝記を出版へ 県初の五輪出場・故阿武巌夫選手を顕彰」：地方版山口。

毎日新聞（2014年11月4日-12月20日）「戦後70年に向けて・五輪の哲人：大島鎌吉物語／1-33」：朝刊。

三上考道 監修・昭和館学芸部編集（2008）昭和館特別企画展図録、昭和館。

日外アソシエーツ（1990）スポーツ人名事典、日外アソシエーツ。

日本体育協会・日本オリンピック委員会（2012）日本体育協会 日本オリンピック委員会100年史 1911～2011：日本体育協会・日本オリンピック委員会の100年 PART 1、日本体育協会・日本オリンピック委員会。

岡邦行（2013）大島鎌吉の東京オリンピック、東海教育研究所。

大島鎌吉（1955）カール・ディーム博士の人と業績、体育の科学・日本体育学会編　第5巻11・12号、杏林書院：426-430。

Steins, Gerd (2011): Olympiastadion Berlin – Ort der Erinnerung – Gerd Steins in Sport in Berlin. [http://www.germanroadraces.de/24-0-25863-olympiastadion-berlin-ort-der-erinnerung-.html]. 24.20.2011.

内海和雄（2011）「オリンピックと平和」・ノエル - ベーカー卿、広島経済大学研究論集第34巻第2号、広島経済大学：1-21。

内海和雄（2012）オリンピックと平和－課題と方法－（広島経済大学研究双書 第38冊）、不昧堂出版。

読売新聞（1964年9月28日）「五輪選手を遺品でしのぶ 戦火に散った31人」：朝刊。